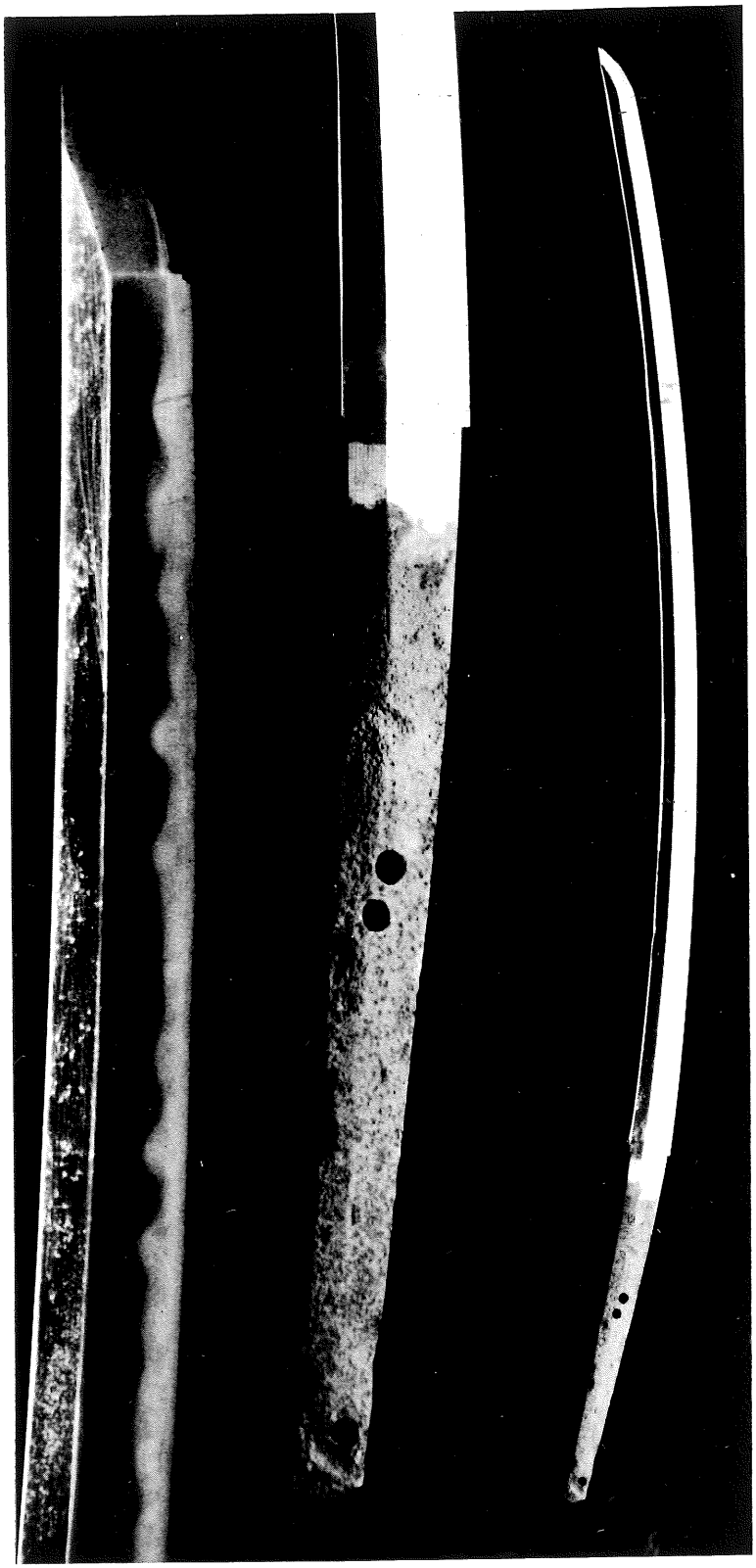
鉄砲伝来四百五十周年記念

種子島の刀剣展

（平成五年九月十六日～同年十月八日）



種子島家重代の宝刀（銘）国　宗

種子島開発総合センター

種子島刀剣史概略

平山武章

種子島家譜の冒頭に、時の征夷大将軍源頼朝に対し、平清盛の曽孫、信基を、自分の養子として助命を請い、南海十二島の島主として出発させたの北条時政で、その門出に与えたのが備前三郎国宗作の（松作）を与えたと明記してある。時代は建仁年間だが、頼朝の死はそれよりも三年早いから、この裏にはまだ勢力を保持していた北条時政や政子などの思惑が大分に働いていそうである。国宗は備前の刀工で、北条幕府のお抱えとなった名工といわれている。

種子島刀工に関する家譜記録を抜粋すると、

天文年間、清定（八板金兵衛）師不詳
天正文禄の間、国情（平瀬石見の嫡子）
慶長年間、清定（右、石見の嫡子）
正保・明歴の間、清重（八板五郎左衛門）
宝永年間、定行（平瀬太郎兵衛）
安永・天明年間、国命（牧瀬安兵衛）
当時、国肥（国命嫡子）

右はおよそ二百余年間のことで、刀工の名は十名のみ。一方、鹿児島県鉄砲鍛冶名鑑によばれ天文から文政まで、三十四名の名がつらなる。これに係って次の家譜記事は興味深い。天正十八年三月、太閤秀吉は、種子島久時に、小田原攻めの出兵を免ずる替りに、二十匁筒の鉄砲二百挺の上納を命じた。久時は急ぎ帰島して、年内にそれを完成して事なきを得たが、この時は刀工も鉄砲作りに動員されたものと思われ、両刀使いの器用さが、分業、多量生産方式の鉄砲鍛冶へと転進することになったのではあるまいか。

数すくない種子島刀ではあるが、その出来栄えから、種子島鍛冶の、融通無碍の気質がうかがわれる点も注目したいと思う。

（表紙説明）

◀太刀（銘）国宗　鎌倉時代

長さ九十四・〇五糎　反り四・三糎

種子島　時邦　氏蔵

備前三郎と号す。貞永（1232）～弘安（1287）の間、備前国新田庄和気の住人。非常に長命の鍛冶で作暦がなかい。あるいは、二代三代あるとの説もある。若冠二十歳（正治元年）（1199）で幕府に招かれ鎌倉において作刀し相州伝の源流となった。後、備前に帰ったが北条時頼の命により八十二歳の高令で再度出府した（弘長元年1261）新藤五国光の親、又は師とも云われ、この時代屈指の名工である。この太刀は、種子島家重代の宝刀で鎌倉中期独特の猪首　元幅先幅の差が少ない。頑丈な造り込みで板目が約み、やや肌立つ剛い地鉄に沸つき移り立ち

◀

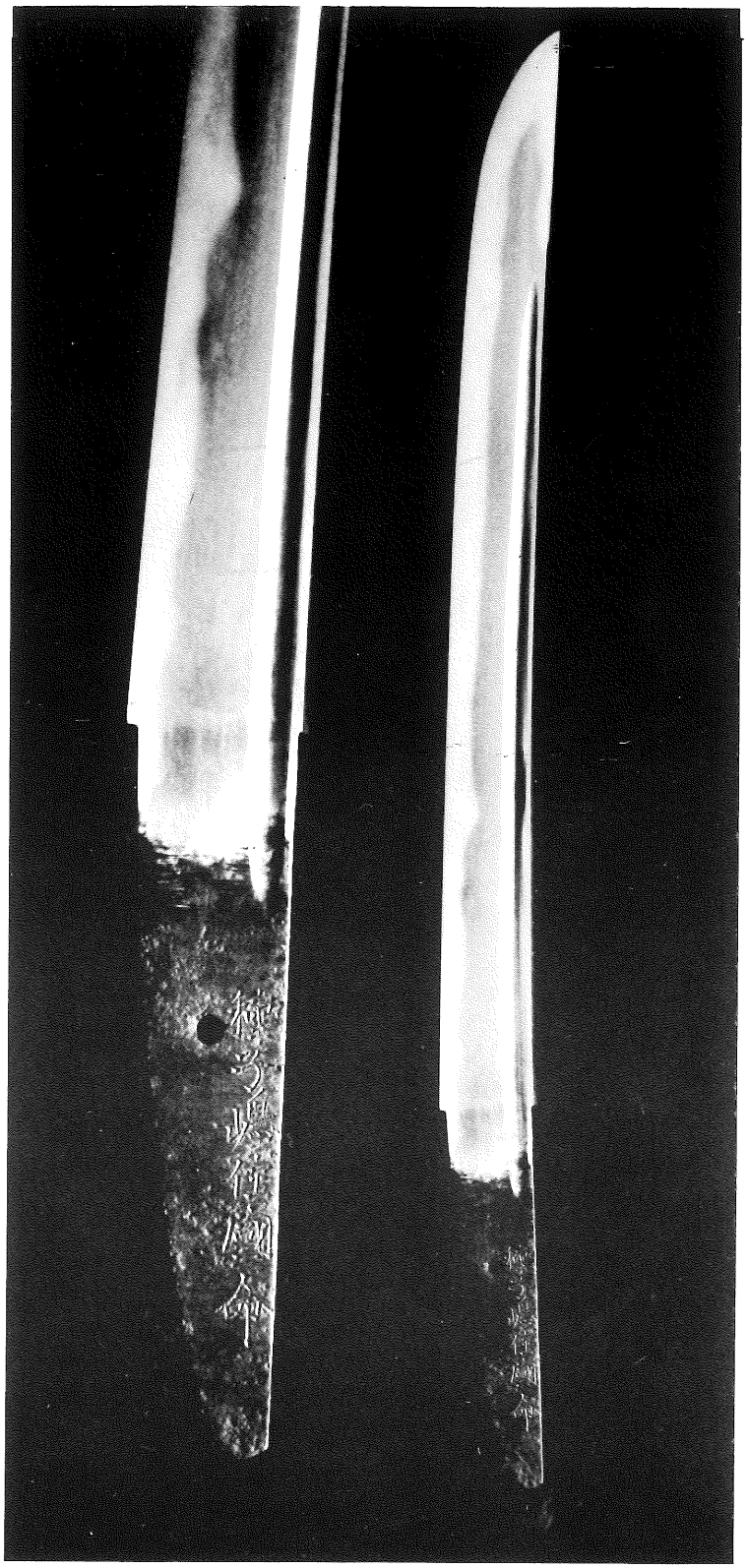
脇差

（銘）種子島住国命　市指定文化財

長さ三十六・四糎　反り〇・四糎　江戸時代

井元正流氏蔵

種子島の刀工で銘鑑に其の名の見える鍛冶は、十指に余るが、その殆んどが現存せず又、在銘のものを見ない。この時代は、諸国にも名工は少ないのであるが、薩摩に一平安時代　主水正正清、波平安国　伯耆守正幸等、名工が輩出して世に薩摩刀の声価を大いに高めた。国命は、この時代の刀鍛冶で幸い在銘のものが、数口現存している。姿に品位があり総体に頃合で手持ちが良く地鉄剛く鍛え精緻で地刃共に沸づき砂流し金筋入いる。特に物打ちから上の焼巾広く沸匂も激しく強くつき帽子は小丸、返りやゝ深く締りごころ、茎（なかご）の鑢（やすり）は切である。非常に作域の広い鍛冶であったと思われる。浅薄な偏見との叱正を承知で種子島が誇りうる名工であり種子島正宗であると畏れずにたたえたい。



爲種子鳴輒時雄犬棟之

▶脇　差

（銘表・伯耆守平朝臣正幸
裏・為種子嶋輔時雅丈錬之
（市指定文化財）
文化六年己二月七十七歳真錬造
長さ三十八・五糎　反り一糎　江戸時代
田　上　容　正　氏蔵

三代目正良（一説に宮原正近門人ともいう）寛政元年（1789）十二月一日伯耆守受領正幸と改めた。文政元年（　　）四月二十二日没、八十六歳薩摩新々刀を代表する誉れ高い刀工である。作柄は、幅広大切先で豪壮なものが多く地鉄板目が良く、つみ地沸つく、沸元本位で砂流し金筋がかり芋蔓という独特の金筋様のものが刃縁にからむ自彫りの竜や旗鉾もあり上手という。又、刀剣鍛練書を著わすなど、刀工教育者としても活躍。名刀のみならず斯界に大きな功績を残した名工である。この脇差は、二十三代島主　久道の元服祝いに作らせたもの。

種子島刀剣名鑑（種子島家譜第二巻より）

◆文化元年十一月二十一日
命を奉じ、吾が地、古今の刀を製作する治工の姓名及び師範、年号を細書して官に呈す。左に記す。

○天正、文禄の間　国清（平瀬石見）
右、師範相知り申さず候、家の伝記焼失仕り候。
○慶長の頃、清定（右、石見の嫡子、平瀬金兵衛）
右、同断。
○当時、良等（右、清定より六代　平瀬平兵衛）
右、師範薩州　正良
○当時、良則（右、良等の嫡子、平瀬平右ェ門）
右、同断。正良方へ稽古の為、　り居り申し候。
○天文年間　清定（平瀬今兵衛）
右、師範相知り申さず候。
○正保、明暦の間　清重（八板五郎左ェ門）
○宝永年間　定行（平瀬太郎兵衛）
右、師範家　薩州奥和泉守忠重
○宝延、天明の間　国命（牧瀬安兵衛）
右、師範　奥国平
○当時、国肥（右　国命の嫡子　牧瀬安兵衛）
右、父　国命伝
○当時、良定（牧瀬休治）
右、師範　薩州正良

（出品刀剣等解説）

○太　刀　銘・国宗
長さ九十四・〇五糎　反り四・三糎　種子島　時　邦　氏蔵

○脇　差　銘表伯耆守平朝臣正幸　（江戸時代）
（裏為種子嶋輔時雅丈錬之文化六年己二月七十七歳真錬造
長さ三十八・五糎　反り一糎　田　上　容　正　氏蔵

○脇　差　銘・種子島住国命　市指定文化財　（江戸時代）
長さ三十六・四糎　反り〇・四糎　井　元　正　流　氏蔵

○刀　銘表正国六十三代孫波平住大和守平朝臣行安
（裏慶応三年二月日望依作之　（江戸時代）
長さ八三・四九糎　反り一・二糎

○刀　無銘　特別貴重刀剣
長さ六十七・六糎　反り一・七糎
認定　兼定

○刀　銘・種子島住国命　（江戸時代）
長さ六十九・六糎　反り一・八糎

○刀　銘・波平家利　特別貴重刀剣
長さ六十九・八糎　反り二・二糎

○脇　差　銘・波平安常　特別貴重刀剣
長さ三〇・八糎

○打刀拵　特別貴重小道具
黒　色塗鞘

○変塗鞘小さ刀拵特別貴重小道具
○刀　銘・月山貞勝　特別貴重刀剣　（大正時代）
長さ六十九・七糎　反り二・八糎

○短　刀　銘・吉光（室町時代）
長さ二〇・四糎　反り〇・〇糎　河内国員氏蔵

○脇　差　銘・廣（以下切る）　（江戸時代）
長さ四十七・六糎　反り一・〇糎　河内国員氏蔵

○刀　銘・国命　（江戸時代）
長さ六十七・四糎　反り一・三糎　河内国員氏蔵

○刀　銘・備前国住長船与三左衛門尉祐定　（室町時代）
長さ六十四・五八糎　反り一・九八糎　河内俊男氏蔵

○脇　差　銘(表)相州住正　（室町時代）
(裏)宝徳三年二月日
長さ三十八・五糎　反り〇・五糎
種子島家伝来の刀　河内俊男氏蔵

○短　刀　銘(表)則廣　（江戸時代）
(裏)文政六年二月日為西村時貫造
刀長二十糎反〇・〇糎（小牧の河内家にあったもので種子島刀工の作ではないかと思われる）　河内俊男氏蔵

○脇　差　銘・和泉守兼定（江戸時代）
長さ四十四・四糎　反り一・〇糎　深田昌徳氏蔵

○脇　差　無銘
長さ五十一糎　反り一・六糎　深田昌徳氏蔵

○脇　差　無銘
長さ四十五・四糎　反り〇・九糎　深田昌徳氏蔵

○脇　差　無銘
長さ三十三糎　反り〇・五糎　深田昌徳氏蔵

○刀剣図譜　壱巻　平瀬キヨ氏蔵

あとがき

種子島刀剣展示は、昭和五十九年の第一回展から十年目になる。前回と同様の家宝名品を網羅し得たことは幸いで、これは一に実行委員の御高配の賜であった。

鉄砲伝来四百五十周年に併せてのセンターの企画も、たたら、製鉄、鍛冶と、弥生時代以降の種子島の技術面からの考察に大きく役立ったのではあるまいか。御出品下さった方々に感謝の意を表する次第であります。（平山）